



日本統計学会 会報 2011.4.25

No.
147

発行—— 一般社団法人 日本統計学会
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5F
(財) 統計情報研究開発センター内 日本統計学会事務局
Tel & Fax : 03-3234-7738
編集責任— 岩崎 学 (理事長) / 中西 寛子 (庶務理事)
根本 二郎 (広報理事) / 鈴川 昌夫 (広報理事)
振替口座— 00110-3-743886
銀行口座— みずほ銀行九段支店普通 1466879番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

- | | |
|---|--|
| 1. 会長就任のご挨拶…………… 竹村彰通… 2 | 8. 松田安昌会員の第7回 (平成22年度) 日本学術
振興会賞受賞について …………… 15 |
| 2. 会長退任のご挨拶…………… 美添泰人… 3 | 9. 統計検定の開始について …………… 15 |
| 3. 2011年度統計関連学会連合大会のおしらせ (第二報)
…………… 中村永友・前園宣彦・西井龍映… 5 | 10. 修士論文・博士論文の紹介 …………… 15 |
| 4. 日本統計学会春季集会2011の報告
…………… 岩崎学・縄田和満・佐藤美佳… 9 | 11. 外国人研究者来日案内 …………… 17 |
| 5. 藤田利治君を悼む…………… 岩崎 学… 10 | 12. 評議員会議事録 …………… 18 |
| 6. シリーズ：統計学の現状と今後 | 13. 理事会議事録 …………… 19 |
| 6.1 「鯨類資源の管理と統計学」………… 北門利英… 11 | 14. 新刊紹介 …………… 21 |
| 6.2 「統計学史」…………… 竹内恵行… 13 | 15. 学会事務局から …………… 21 |
| 7. 和文誌特集号投稿締切延期のお知らせ
…………… 大森裕浩・渡部敏明… 14 | 16. 投稿のお願い …………… 22 |

東北地方太平洋沖地震のお見舞い

3月11日に東北地方を未曾有の大震災が襲いました。被災された学会員その他関係者の皆様に、心からお見舞い申し上げます。この地震は、1000年に一度という規模の津波を発生させ、東北地方沿岸地域に我々の想像を絶する被害をもたらしました。そして、小さな確率と、確率がゼロであることの違いを、改めて教えてくれました。また、原子力発電所の危機は地震発生後2週間を経てもまだ予断を許さない状況が続いています。このため、起こり得る最悪のケースの放射能汚染に対する不安が払拭できず、社会の大きな不安定要因となっております。社会が困難な選択にせまられた時こそ、それぞれの選択肢を定量的に評価したうえでの確かな判断が下せるような基盤を与えることが、我々の使命であると考えます。一刻も早く、客観的な根拠によって不安が解消され、このような事態が収拾されることを祈っております。日本統計学会は、今回の未曾有の大災害の経験を分析・評価し、統計学に関する知見を最大限にいかして今後の我が国の復興に貢献することができます。そのような活動にできる限り多くの会員が参加できるように、学会運営を心がける所存です。

日本統計学会会長 竹村彰通

2011年3月25日

1. 会長就任のご挨拶

竹村 彰通（東京大学）

この1月より日本統計学会会長として学会運営のお手伝いをさせていただくことになりました。岩崎理事長をはじめとして、理事、評議員の方々のご協力のもとで、学会発展のために微力を尽くす所存です。

折しも、前会長の美添会長のもとで進められてきた日本統計学会の一般社団法人化の移行作業が最終段階で、私もその膨大な作業のいったんを垣間見ることとなりました。社団法人移行に際して、大量の文書を正確に作る必要があります、そのような移行作業を遂行していただいた美添前会長、岩崎理事長、中西理事、山下理事をはじめとする皆さんに大変感謝しております。法人化の作業が一通り終わって、新しい制度で安定的に学会運営ができるになればだいぶ落ち着くと思いますが、長い学会の歴史の中で、先人のこのような献身的な努力が積み重なって現在の学会があることをあらためて認識した次第です。

法人化は2008年に施行された「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律」への対応のために必要な作業であり、学会にとってはいわば外的な環境の変化によって必要となった作業でしたが、法人となることのメリット（あるいは任意団体にとどまることのデメリット）も大きいものと思います。一般社団法人となることにともない、一定の法的あるいは社会的な認知が得られることとなり、一般社団法人設立の目的にそった形で、さまざまな学会の事業をより積極的に社会にアピールしていくことができます。多くの作業をともなった法人化ですので、このメリットを大いに活かしていきたいと考えます。

法人化の作業が一段落した後の日本統計学会としての大きな目標は統計検定の開始です。本年は11月20日（日）に検定試験をおこないます。統計検定の詳しい内容については、また会員の皆様に

別途お知らせいたしますが、いくつかのレベルの試験を計画しております。統計検定の実施には、広報、団体受験の設定、サンプル問題の検討など、さまざまな仕事が必要です。まだ準備は緒についたばかりです。会員の皆様には、統計検定のあり方についてご議論いただくとともに、実際の準備にも積極的に参加していただくようお願いいたします。

統計学をとりまく現状を考えると、以下に述べますように、統計検定の意義が社会的に認められ統計検定が定着して行く可能性は非常に大きいと考えております。しかしながら、受験者数などについても、統計検定が軌道にのるまでは幾多の困難が想定されます。統計検定の実施にあたっては、財団法人統計情報研究開発センターおよび財団法人統計研究会からは物心両面にわたる支援をいただいております。検定の実施にあたっては統計検定センターを実施主体として共同で設立し、これを運営していくこととなりました。ここに統計学会として深く感謝の言葉を述べさせていただきます。

統計検定をとりまく現状として考慮すべき点はいくつかありますが、その一つには初等中等教育（小、中、高等学校）における指導要領の改訂があげられます。本年4月からは全国の小学校において新学習指導要領が全面实施されます。今回の指導要領の改訂においては、小学校から高等学校までのカリキュラムで統計の内容が大幅に拡充されました。この背景としては、諸外国のカリキュラムにおいて、生徒の課題発見及び解決力の重要な要素として、統計教育の内容が充実されてきたことがあげられます。これに対して、我が国のこ



れまでの指導要領では統計教育の内容は極めて乏しく、またその扱い方も決められた計算方式を覚えるという傾向が強いものでした。このような我が国と諸外国との教育の考え方の違いは、種々の学力の国際比較の結果にも反映されており、我が国の教育の革新が求められています。

隣国の韓国や中国でも、大学や大学院において統計を専攻する学科や専攻が多く設置されており、統計を学んだ学生が社会からも評価される素地ができつつあります。我が国では、少子化の中で、新たな学科や専攻の設置は困難とは言え、横断的な性格を持つ統計教育への期待と需要は大きいものと考えます。このような中で、統計検定は統計の学習成果の質を保証する役割を果たすとともに、試験の内容自体によって統計学で学ぶべき内容の目安を与える役割を果たすものであり、その意義については広く教育関係者および産業界から理解を得られるものと確信しております。

今回の統計検定の実施にあたっては、国際資格としてイギリスの Royal Statistical Society (RSS) の検定試験を、日本統計学会と RSS の共同主催でおこなうこととしております。この準備のために、RSS の学会運営の考え方や方法について多くを学ぶ機会がありました。RSS は175年の伝統を持ち、これまでのその学術的な貢献は非常に大きなものがあります。しかしながら、時代の変化

に対応し、アカデミックな学会活動のみならず、professional society としての活動や教育活動にも力をいれております。RSS の検定試験の担当者の言うところによれば、時代が変化して行くなかで伝統に安住しては生き延びることはできない、ということでした。この言葉は、80年の伝統を持つ日本統計学会にも等しくあてはまるものと考えます。

以上、いささか大きな目標をにかけて、どこまで実現できるのかはわかりませんが、このような学会の進むべき方向についてぜひ会員の皆様のご理解をいただき、積極的な学会活動への参画をお願いするものです。

略歴：

竹村彰通（たけむら あきみち） 統計学 Ph.D.

1976年 東京大学経済学経済学科卒業

1982年 米国スタンフォード大学統計学 Ph.D.

1982年 米国スタンフォード大学統計学科客員助教授

1983年 米国パーデュー大学統計学科客員助教授

1984年 東京大学経済学部助教授

1997年 東京大学大学院経済学研究科教授

2001年 東京大学大学院情報理工学系研究科数理情報学専攻教授

研究分野：多変量解析の理論、計算代数統計

2. 会長退任のご挨拶

美添 泰人（青山学院大学）

2009年1月からの2年間は、岩崎理事長をはじめとする理事の皆様の積極的な活動に支えられて、何とか任期を終えることができたというのが実感です。任期中に、従来からの業務に取り組みながら、いくつかの新たな試みを推進していただいた理事の皆様、その学会運営を支えてくださった評議員および会員の皆様、さらにさまざまな機会にご協力を頂いた政府統計関係の方々に、改めて感謝申し上げます。

就任の際、北川前会長が取り組んでこられた活動を引き継ぎましたが、中で主要な課題とされたものに、(1) 学会賞などの活性化、(2) 統計関連学会連合の活動支援と日本統計学会の位置づけ、特に春季集会のあり方の検討、(3) 学会の法人化があり、その他にも(4) 学術会議、科研費、統計教育などがありました。これを踏まえて、会長就任当時に私が意識していた具体的な活動は以下のようなものでした。(1) 統計関連学会連合の活

動を通じて日本全体の統計・統計学の発展に寄与すること、(2) 統計教育を活性化し若手研究者を支援すること、(3) 特に経済・社会に関する重要な情報源である公的統計の利用を拡大すること、そして(4) さまざまな機会を捉えて統計分野に関する広報活動を行うとともに日本学術会議などで統計分野としての貢献を進めること。

就任して1年目は民主党への政権交代という大きな変化が起きたこともあり、「事業仕分け」に関連して、若手研究者への支援と、国勢調査など公的統計の質的低下を防ぐことを目的として、統計関連の各学会とともに二つの提言を行うこととなりました。どちらかといえば受身の活動でしたが、この作業を通じて統計関連学会間の協力関係が従来より強められるという結果も生まれました。統計関連学会連合に参加している6学会相互の意思疎通が十分に図られた背景には、他学会にも所属している日本統計学会会員の積極的な協同がありました。不慣れな統計関連学会連合の理事長であった私の支えとなったのは、会員諸氏の統計に対する強い理念でした。

私の任期中にも、統計関連学会連合大会は、2009年には同志社大学、2010年には早稲田大学で開催され、年とともに活発になってきました。前期の統計関連学会連合理事会および組織委員会によって進んでいた準備を引き継いだ形となりましたが、同志社大学での学会連合大会は、組織委員会および同志社大学の皆様の協力によって成功裏に終えることができました。そこで、1年目の課題への取組みが受身であったことの反省も含めて、残された期間に実行できることを改めて検討する機会を得て、経験豊富な評議員や理事の方々から全面的な協力を得られたことから、任期の2年目には「法人化」の検討と「統計教育に関する質保証制度」に関する取組みを始めることとしました。

学会の法人化は長年の懸案となっていました。公益法人制度改革によって法的な環境が整ったこと、内閣府で公益法人制度改革に携わった経験を持つ政府の統計関係者の親身な協力が得られたことから、任期中の法人化を目指すことにしました。

幸いにして学会組織特別委員会の矢島委員長を中心とする検討委員会の皆様の綿密な討議を経て、来る4月1日から一般社団法人日本統計学会に移行する運びとなりました。

「統計教育の質保証」は、岩崎理事長、統計教育委員会の渡辺美智子委員長、学会活動特別委員会の田村委員長など、日本統計学会が中心となって推進してきた統計教育活動を背景として検討を開始したものです。事務的作業が膨大となることから人的資源と財源で困難が予想されましたが、学会事務局である統計情報研究開発センターの全面的な協力を得て、2011年11月に最初の統計検定を実施する目標を定め、具体的な活動を開始しました。統計検定という制度が明確な形を取るまでには、岩崎学氏、竹村彰通氏、田村義保氏、椿広計氏、舟岡史雄氏、渡辺美智子氏が、検討の初期段階から数え切れないほどの検討会合に参加し、多くの建設的な提案をされました。これらの会合を支えて、毎回、正確かつ丁寧な議事録を作成した後藤智弘会員を含めて、日本統計学会会員の意欲と能力に、改めて強い感銘を受けました。

統計検定という目標を明確に定めてからは、質保証委員会、運営委員会などに規模を拡大し、多数の会員の献身的な協力を得ることができるようになりました。さらに統計情報研究開発センターの久布白寛専務理事および近藤登雄部長には、会合の運営、検定運用システムの構築、関連予算の積算、会場の手配など、中心的な活動への支援を学会事務局委託費の枠外で提供していただいています。事務局という立場を超えたご協力に感謝致します。

統計検定の導入を促進したものとしては、従来からの統計教育委員会（渡辺美智子前委員長、藤井良宜委員長）の活動に加えて、田栗正章会員が中心となって、統計関連学会連合として取りまとめた「統計学分野の教育課程編成上の参照基準」の作成があります。この参照基準は、日本学術会議に各分野から参加している統計関係者の力を結集した形で、竹村彰通会員が日本学術会議に提示するほか、文部科学省、内閣府など各方面に提出

され、今後の大学教育における統計学教育の指針になるものです。統計検定の運営委員、問題作成に関わる多数の会員、その他この企画に尽力して下さった皆様全員のお名前をここに記すことはできませんが、皆様の熱意に支えられて学会運営に携われたことは、会長としても幸運な経験でした。

法人化と統計検定の計画は、昨年夏の総会において会員の皆様の承認をいただきました。これらは、今後の学会の発展および日本における統計教育の整備に対して有効な仕組みとなるものと考えています。これらの課題については多少とも進展が見られましたが、会長就任の時点で想定していた活動のほとんどは、将来にわたって継続すべきものです。その中には、科研費の獲得などを通じた若手研究者への支援、統計教育の一層の充実などが含まれます。もちろん、学会の最大の目的は統計学研究の発展を支援することです。

このような課題に加えて、統計学および関連する諸分野における応用手法が社会に浸透するにつれて、日本統計学会が取り組むべき新たな課題が発生することが見込まれます。幸いにして、次期会長の竹村彰通会員は理事長職の経験を有するだけでなく、統計検定事業に関する検討過程でも多大な貢献のある方です。二期連続で選出された経験豊富な岩崎理事長とともに、今後の学会の進むべき方向を明確に示し、着実に成果を上げられるものと確信しています。

4月からの法人化に伴って新たに代議員制度が導入されますが、評議員の皆様には引き続き代議員として学会運営の労をお願いし、お引き受けいただいています。会員の皆様におかれましては、一般社団法人日本統計学会に対して、これまで以上のご支援、ご協力のほど、よろしくお願い致します。

3. 2011年度統計関連学会連合大会のお知らせ（第二報）

連合大会

運営委員会委員長 中村永友（札幌学院大学）
実行委員会委員長 前園宜彦（九州大学）
プログラム委員長 西井龍映（九州大学）

このたびの震災で被害に遭われたすべての方に、心からお見舞い申し上げます。震災に対して我々ができる貢献を考えるため、特別セッション（地震、リスク予測、放射線影響評価等）の開催を予定しています。

さて2011年度統計関連学会連合大会について進捗状況をご報告いたします。今大会も統計関連学会連合に所属する全ての学会の共催により開催する運びとなりました。本大会の第1日目（9月4日）はチュートリアルセッションと市民講演会を、今年100周年を迎えた九州大学のご後援をいただき、福岡市の繁華街・天神に位置するアクロス福岡で開催いたします。一般講演などは2日目以降（9月5～7日）、九州大学の新しいキャンパスで

ある伊都（いと）キャンパスで開催します。

この第二報では、チュートリアルセッション、市民講演会、企画セッション、コンペセッションなどの概要などを項目ごとにご紹介いたします。今後、連合大会のウェブページ <http://www.jfssa.jp/taikai/> に関連情報や詳細情報を随時掲載していきますので、ご覧ください。

1. 大会日程、開催場所、各種受付期間

開催日程：2011年9月4日（日）から7日（水）
までの4日間

9月4日：チュートリアルセッションと市民講演会（アクロス福岡、福岡市中央区）

9月5～7日：本大会（九州大学 伊都新キャン

パス1号館, 福岡市西区)

共催: 応用統計学会, 日本計算機統計学会, 日本計量生物学会, 日本行動計量学会, 日本統計学会, 日本分類学会

懇親会: 9月6日(火) 18:00~(予定), 九州大学生協(伊都新キャンパス)

講演申込: 5月9日(月) 9:00~6月3日(金) 17:00

原稿提出: 6月13日(月) 9:00~7月8日(金) 17:00

事前参加申込: 7月19日(火) 9:00~8月19日(金) 17:00

2. 講演の申込

講演には次の種類があります。

- ・一般講演
- ・企画セッション講演
- ・コンペティション講演

申込み方法は, すべての講演に共通の事項と種類ごとに異なる事項がありますので, ご注意ください。

(1) すべての講演に共通な事項

講演をご希望の方は, 上記ウェブページからお申込み下さい。これ以外の申込み方法はありません。ウェブページ上で, 「一般講演」, 「企画セッション講演」, 「コンペティション講演」のいずれかを選択して下さい。「企画セッション講演」はオーガナイザーが一括して, それ以外は講演者が申し込んでください。

(2) 「一般講演」に関わる事項

通常の講演は「一般講演」として講演者がお申込み下さい。ウェブページ上の講演申込み手順にしたがって申込みをして下さい。プログラム編成の際の参考になりますので, 最大3個までのキーワードを, 重視する順にご選択ください。また, 講演者(連名講演者を含む)のうち, 少なくとも1名は共催6学会のいずれかの会員であることが要件です。

(3) 「企画セッション講演」に関わる事項

オーガナイザーによる一括申込みとします。

(4) 「コンペティション講演」に関わる事項

コンペティション講演は, 研究内容とプレゼンテーションの能力を競う企画で, 今回で9回目を迎えます。参加資格は2011年4月1日時点で満30歳未満の若手研究者で, 学生, 教員, 社会人は問いません。連名講演の場合, コンペティション対象者は実際に口頭発表する方です。なお, 講演の申し込み時点でコンペティション対象者は, 共催6学会のいずれかの会員である必要があります。

ただし, 申し込みと同時に入会手続きをされてもかまいません。事前審査は行いません。審査は, 当日の口頭発表に対しての数名の審査員と参加者の一般審査との総合評価で行います。なお, コンペティションは9月5日, 6日に実施し, 表彰式を9月6日の懇親会の中で行う予定です。詳細は連合大会のウェブページに掲載される「コンペティション講演のご案内」をご覧ください。

3. 講演報告集用原稿の提出

報告集用の原稿はA4サイズで1ページです。インターネット経由で電子ファイル(PDF形式)を提出していただきます。原稿提出期間は「1. 大会日程, 開催場所, 各種受付期間」を参照していただき, 厳守してください。ご希望の方は, 報告集用原稿とは別にウェブページに掲載する詳細論文を受け付けます(A4サイズ, 最大10ページまで, PDF形式, ファイルサイズは1MB以内, フォント埋め込み)。

ファイルをメールによりプログラム委員会宛 submission2011@jfssa.jp にお送り下さい。報告集用原稿および詳細論文の執筆要領につきましては, 連合大会ウェブページ(<http://www.jfssa.jp/taikai/>)をご覧ください。

「企画セッション講演」の報告集用原稿はオーガナイザーが集約してご提出下さい。したがって, 企画セッション講演者は, 最終的な原稿提出が締切りに間に合いますようにオーガナイザーに原稿をお送り下さい。

講演報告集は大会当日に参加登録と共にお渡しします。

【注意】報告集は、本大会ウェブページにて期間限定で公開予定です。公開を希望しない場合には、報告集用原稿の提出時に、その旨をご指示ください。

4. 企画セッションのご案内

学会や個人から申請のあった14件の企画セッションが予定されております。テーマ（仮題）とオーガナイザーの氏名、所属は以下の通りです。テーマのねらいや講演者・講演タイトル等につきましては連合大会のウェブページをご覧ください。また新しい試みである「(14) 統計学初級中級講座」のセッションが開かれます。

なお、企画セッションの運営はオーガナイザーに一任しておりますので、企画セッションについてのご質問がございましたら、直接オーガナイザーにお問い合わせ下さい。企画セッションの日程はプログラム作成時に決定いたします。

企画セッション名とオーガナイザー（敬称略）

- (1) 日本統計学会会長講演：岩崎 学（成蹊大）
- (2) 日本統計学会各賞受賞者講演：岩崎 学（成蹊大）
- (3) 日本計量生物学会シンポジウム「非劣性試験における統計学的課題」：高橋 邦彦（国立保健医療科学院）、服部 聡（久留米大）
- (4) 日本計量生物学会奨励賞受賞者講演：手良 向 聡（京都大）
- (5) 日本分類学会 医学データの分類と判別：栗原 考次（岡山大）
- (6) 応用統計学会 学会賞受賞者講演：黒木 学（大阪大）、永田 靖（早稲田大）
- (7) 応用統計学会 環境・生態データのモデル化と解析：清水 邦夫（慶應義塾大）
- (8) 応用統計学会・日本リモートセンシング学会共同企画セッション（タイトル TBA）：清水 邦夫（慶應義塾大）、福田 徹（宇宙航空研究開発機構）
- (9) Model Selection and Model Averaging ～最近の展開：西山 慶彦（京都大）
- (10) 統計教育の充実とその評価に対する取り組み

み：藤井 良宜（宮崎大）

- (11) 欠測データ解析とその周辺：狩野 裕（大阪大）
- (12) マルチオミックスデータ解析によるトランスレーショナルメディシンの統計的諸問題：井元 清哉（東京大）、山口 類（東京大）、樋口 知之（統数研）
- (13) 計算代数統計学の展開：原 尚幸（新潟大）、竹村 彰通（東京大）
- (14) 統計学初級中級講座「統計的因果推論入門」：岩崎 学（成蹊大）

5. チュートリアルセッションのご案内

下記の2つのテーマでチュートリアルセッションを開催いたします。2つの会場で並行して開催しますので、どちらかをお選びください。参加費については「7. 参加申込と大会参加費」をご覧ください。

日 時：2011年9月4日（日）13：00～16：00
（12：30より受付開始予定）

場 所：アクロス福岡（福岡市天神）

テーマA：「ゲノム情報に基づく個別化医療へ：マルチオミックスデータと統計解析」

講演者：井元 清哉 先生（東京大）

開催趣旨：近年の生命科学におけるデータ計測技術の進歩はめざましいものがあります。この膨大な細胞内の生体内分子を計測したマルチオミックスデータをゲノム情報に基づく個別化医療へと繋げるための統計科学的データ解析法について解説をお願いしました。

テーマB：「時空間統計学の理論と経済・脳信号データ分析への応用」

講演者：松田 安昌先生（東北大）、吉田 あつし先生（筑波大）、三分一 史和先生（統数研）

開催趣旨：社会・自然科学の様々な分野において時空間データを分析する方法の開発が強く望まれています。ここでは時空間データ分析の基本的な考え方を紹介し、空間計量経済・脳信号データ分析の実際をとりあげていただきます。

6. 市民講演会のご案内

下記の2つのテーマで市民講演会を開催いたします。参加費は無料です。

テーマ1：「若紫やさぶらうーいま『源氏物語』をコンピュータで読む」

講演者：村上 征勝先生（同志社大）

時間：16：30～17：15

概要：「若紫さんは控えておられますか」、『紫式部日記』の寛弘5（1008）年11月1日の記述には、紫式部が『源氏物語』の登場人物の若紫（のちの紫の上）に見立てられ、藤原公任からこのように話しかけられたとある。紫式部によって『源氏物語』が書かれてから1000年を経た今日においても、『源氏物語』54巻がどのような順番で書かれたのか、54巻の中には紫式部以外の人によって書かれた巻があるのではないかなど、日本古典文学の最高峰とされる物語にもいまだ不透明な部分は多い。

このような問題に対し、コンピュータを用い文章を数量的に分析することで解明しようとする研究が試みられている。講演では、これまでの国文学の分野における研究とはまったく異なる、数量的観点から『源氏物語』を読む研究を紹介する。

テーマ2：「新学習指導要領で目指すものー統計の内容を中心にー」

講演者：長尾 篤志先生（国立教育政策研）

時間：17：15～18：00

概要：平成21年3月に告示された高等学校学習指導要領数学科では、数学的活動が一層重視され、数学Ⅰと数学Aに課題学習が設けられるとともに、数学Ⅰに統計の内容「データの分析」が導入されました。今回、このような教育課程の改善を通して何を目指そうとしているのか、「データの分析」ではどのような指導を行いどのような能力を生徒に育てるべきなのかなどについて、お話しいたします。

7. 参加申込と大会参加費

当日受付の混雑を緩和するため、ウェブページから事前申し込みを行います。受付期間については

「1. 大会日程、開催場所、各種受付期間」を参照してください。事前申し込みの場合、参加費が大幅に割引になりますのでぜひご利用ください。大会参加費（報告集代を含む）

	事前申し込み	当日受付
会員（共催6学会の会員）	5,000円	7,000円
学生（会員・非会員を問わず）	2,000円	6,000円
学生以外の非会員	12,000円	15,000円
チュートリアルセッション参加費・資料代		

	事前申し込み	当日受付
会員（共催6学会の会員、資料代を含む）	2,000円	3,000円
学生（会員・非会員を問わず：資料代を含む）	1,000円	3,000円
学生以外の非会員：参加費	2,000円	3,000円
〃：資料代	2,500円	3,000円
懇親会参加費		

	事前申し込み	当日受付
一般（会員・非会員を問わず）	4,500円	5,000円
学生（会員・非会員を問わず）	2,000円	3,000円

【注意】

- （1）これまでの大会と同様に、事前申し込みのキャンセルと変更は認めません。大会に参加されなかった場合、報告集などの資料を後日送付いたします。
- （2）市民講演会は無料です。
- （3）共催6学会の会員以外の方が、企画セッションや特別セッションでオーガナイザーから依頼されて講演される場合は、大会参加費が無料です。

8. 宿泊・アクセス案内

今大会では宿泊の斡旋はいたしません。なお、九州大学伊都新キャンパスの周辺には宿泊施設はございません。また大学への接続駅であるJR 筑肥線・九大学研都市駅の周辺にも大きなホテルはございません。福岡市中心部の天神や博多駅周辺のホテルを利用されることをお勧めいたします。天神と学研都市駅の間にある百道（ももち）の周辺にはリゾートホテルがございます。いずれにし

ましても地下鉄の駅に近いホテルをご利用いただくと、利便性がよろしいと思います。

チュートリアルセッションと市民講演会が開催されるアクロス福岡は天神にあり、JR 博多駅や福岡空港からのアクセスは非常に便利です。しかし、本大会の開催される伊都新キャンパスまでは、地下鉄から JR 線を乗り継いで JR 博多駅から約 50 分、福岡空港から約 60 分かかります。なお地下鉄は JR 線と相互乗り入れをしていますので、行き先が西唐津、筑前前原（まえばる）、および筑前深江の電車をご利用ください。姪浜（めいのほま）までの地下鉄に乗りますと、姪浜でホームを移動しなければなりません。また姪浜を始発とする JR 線の電車はありません。

会場へは JR 九大学研都市駅から「九大工学部行き」の昭和バスをご利用下さい。接続はスムー

ズ（乗車時間約 15 分）ですが、時間に余裕を持ってお越しください。なお、JR 九大学研都市駅から会場までのシャトルバスを検討しています。

なお天神や博多駅からは伊都新キャンパスへの直行バス（西鉄バス）が運行されていて、乗り場等の詳しい情報も下記の新伊都キャンパスへのアクセス情報からご覧いただけます。

<http://suisin.jimu.kyushu-u.ac.jp/info/>

福岡市、および近郊の情報は下記のホームページをご参照ください。

福岡観光コンベンションビューロー

<http://www.welcome-fukuoka.or.jp/>

福岡・博多の観光案内サイトよかなび

<http://www.yokanavi.com/>

九州国立博物館（太宰府市）

<http://www.kyuhaku.jp/>

4. 日本統計学会春季集会2011の報告

岩崎 学（日本統計学会理事長）

縄田 和満・佐藤 美佳（春季集会担当理事）

標記の集会が2011年3月6日（日）に立教大学（東京都池袋）で開催され、関係者のご協力により無事終了することができました。今回の集会では、4つの口頭発表セッション「統計教育」、「金融データと時系列分析」、「統計研究の最前線」、「統計改革その後」があり、活発な議論が交わされました。

午前中の「統計教育セッション」（オーガナイザー・座長：竹村 彰通氏）では、昨年9月に日本統計学会賞を受賞された三浦 由己氏の講演が行われました。次いで、Lawrence Pettit氏から王立統計学会の統計試験に関する講演、Joan Garfield氏、Robert delMas氏による米国における統計教育の講演があり、統計教育に関する興味深い話を伺いました。その後、昼休みを中心に学生・若手研究者を中心にポスターセッションが行われました。

午後は、まず、「金融データと時系列分析」（オ

ーガナイザー・座長：渡部 敏明氏）が行われ、藤井 光昭氏、矢島 美寛氏の日本統計学会賞受賞講演、次いで、石田 功氏、竹内 明香氏、大森 裕浩氏によるファイナンスの最新理論に関する講演がありました。その後、春季集会では初めての試みですが、パラレルセッションとして2つのセッションが同時に開催されました。「統計研究の最前線」（オーガナイザー：縄田 和満、座長：岩崎 学）では、椿 広計氏、栗木 哲氏、下平 英寿氏、奥井 亮氏による日本統計学会各賞受賞者講演が行われ、受賞に関する最新の研究結果の報告がありました。「統計改革その後」（オーガナイザー：美添 泰人氏、縄田 和満、座長：舟岡 史雄氏）においては、統計の利用・その問題点などについて、小林 良行氏、高見 朗氏、浜砂 敬郎氏から興味深い報告がありました。セッション終了後、懇親会が開催され会員相互の親睦をはかることができました。集会の参加者数は205名、懇親

会参加者数は61名でした。

ポスターセッションも企画され、28件の発表がありました。会場では、来場者との熱心な議論や学生同士の意見交換など交流がなされておりました。また、優秀な発表について、懇親会において表彰しました。優秀発表賞として、矢部 竜太氏（一橋大学大学院経済学研究科 D1）、吉森 雅代氏（大阪大学大学院基礎工学研究科 D1）の2名、学生優秀発表賞として、岩倉 相雄氏（京都大学大学院経済学研究科 M2）、小川 光紀氏（東京大学大学院情報理工学系研究科 M1）、小林 裕子氏（筑波大学大学院数理物質科学研究科 M2）の3名が受賞し、懇親会会場にて竹村会長より表彰されま

した（氏名順序は、五十音順）。

春季集会の前々日3月4日（金）と5日（土）には、第7回統計教育の方法論ワークショップが開催され春季集会のセッションと併せて統計教育に関する3日間の研究集会となりました。

最後に、このような集会の場をご提供頂いた立教大学に感謝申し上げるとともに、次回2012年の春季集会（一橋大学、国立キャンパスで開催予定）への会員の皆様のご参加をお待ちしています。また、今回の春季集会では会員諸氏からのセッションのご提案もお受けする予定ですので、この点もよろしくお願いいたします。

5. 藤田利治君を悼む

岩崎 学（成蹊大学）

統計数理研究所データ科学研究系の藤田利治教授が、1年余りの闘病生活もむなしく2011年2月15日逝去された。享年58歳であった。藤田氏は、東京大学大学院医学系研究科の博士課程を修了後、国立公衆衛生院、国立保健医療科学院を経て2006年4月に統計数理研究所に着任された。専門は疫学、薬剤疫学、保健統計で、幾多の著書論文の出版に加え、厚生労働省の薬事関係の委員を多年に渡って務められた。

藤田氏がこれまでやってこられたこと及びやり残したことについては、しかるべき人がしかるべき場所に書かれるはずであるので、ここでは個人的な思い出を交えつつ語ってみたい。

藤田利治君と私は高校（静岡県立浜松北高校）の同期であった（同級生であるがゆえに藤田氏ではなく藤田君とさせていただいた）。高校時代は同じクラスになったこともなくお互い同期であることは知らなかったが、あるとき何らかのはずみで椿広計さんが関係していたはず）同期であることが分かって以来、私は彼のような優秀でしかも精力的に仕事をしている同級生がいることがうれしくて、医薬関係の人には「成蹊大の岩崎です。

藤田利治君とは高校の同期でした」と自己紹介するのが常であった。彼が同じことを言っていたとは思えないので、これは私の「片思い」であったに違いない。

研究テーマが近かったこともあって一緒に仕事をする機会も増え、特に2004年から2006年にかけて私が研究代表者を務めた科研費「医薬品の有効性・安全性の統計的評価法の新展開」では彼に研究分担者になっていただき、医薬品の安全性に関するシンポジウムなどを一緒に開催したりもした。藤田君との共著の論文こそないが、そのときの研究成果の一端は、岩崎・河田（2007）および藤田・真山（2007）として日本統計学会誌の同じ号に掲載されている。また、医薬品医療機器総合機構におけるデータマイニングに関する検討委員会では、藤田君が座長で私は委員会の委員として市販後安全性情報のデータベース構築のお手伝いもした。

2010年10月14日にメールで彼の博士課程の学生の学位審査の審査委員を依頼され、お引き受けすることにした。その関係もあり何度か統数研にお邪魔したが、彼の様子はなかなか大変そうであっ

た。それでもその学位に関する事務作業などを的確にこなされ、2011年1月20日の午前10時から統数研で学位論文の公聴会と論文審査を行った。長時間にわたる学位審査を終えて彼の研究室に戻り、若干の書類の不備を修正したりした後私は統数研を後にしたが、それが彼に会う最後になろうとは予測だにできなかった。2月20日の葬儀の際に奥様にお伺いしたところ、その日が彼の統数研への最後の出勤日だったとのことである。そして「もっと研究がしたい」としきりに言っていたそうであ

る。最後の最後まで研究と教育に情熱を傾け続けた比類なき友人であった。

文献

岩崎 学・河田祐一（2007）処置前後研究における平均への回帰とその周辺。日本統計学会誌シリーズJ, 36, 131–145.

藤田利治・真山武志（2007）降圧薬の使用成績調査データベース構築とその活用例。日本統計学会誌シリーズJ, 36, 205–217.

6. シリーズ：統計学の現状と今後

6.1 鯨類資源の管理と統計学

北門 利英（東京海洋大学）

魚などの水産資源がどのような方法で管理されているかはあまり馴染みがないかもしれません。旧東京水産大学（現東京海洋大学）に赴任する前の私も例外なくその一人でしたが、ここ数年になって漸く「水産資源についてデータに語らせる」ことの面白さが多少分かるようになってきました。もちろん水産資源といっても対象の幅が広いですが、ここでは鯨類資源の管理を中心に、私が副議長を務めています国際捕鯨委員会の科学委員会（IWC/SC）の活動も併せて簡単に紹介させていただきます。

水産資源の枯渇を招く主要な原因はいわゆる「獲り過ぎ」に他ならないのですが、どうすれば「持続的かつ効率的な利用」、すなわち長期的に資源を枯渇させることなく、かつ安定して高い漁獲量（あるいは利益）を得られるでしょうか？例えば銀行に預けた預金は利子で増えた分だけを毎年使えば、元金を減らさずずっと利用できるでしょう。これとほぼ同様の考えが水産資源の管理でも成り立ちます。利子すなわち資源量の増加分は資源量のレベルに応じて異なりますが（例えば資源レベルが環境収容力という満限の状態に達すれば

増加量はゼロとなり、また多くの種では環境収容力の50%程の資源レベルで最大の増加量を示す）、その増分だけ獲ることにすれば持続的に資源を利用することが可能となります。

ところが、水産資源の場合には、その元金（＝資源量）を知ること自体もしばしば容易ではありません。また、資源変動のメカニズムも人間が想定しているほど単純ではなく、さらに多くは直接観測することができないため、構造の複雑さに比して情報の不足やバイアスが生じ、そして種々の不確実性への対応が迫られます。いたずらに複雑な資源動態モデルを作成してもデータがそれに追いつけなければ意味がなく、またモデルが複雑になればなるほどパラメータやモデルの不確実性が高まるという問題が潜在的に生じます。そこで、IWC/SCが開発した改訂管理方式（RMP）という方法は、「なるべく少ない情報でまずシンプルなモデルの同定を行う、それを基にあるルールに基づいて保守的な捕獲限度量の算定と捕獲枠の空間的配分の候補を提示する、そしてその捕獲枠と配分の安全性を多様なシナリオの下でのシミュレーションで検討し枯渇のリスクの高い捕獲法を排除する」というアプローチでした。また、この管理方式のシミュレーションでは、将来100年間のいずれの時点でも資源が枯渇の危機に瀕することないように厳しい基準が設けられ、更には5年毎に

資源量などの情報が更新されること、そしてそれに基づいてパラメータと捕獲枠の更新もなされることが想定されており、極めて膨大ではあるが実際の評価がなされています。ところで、先程の「なるべく少ない情報」とは何か？実は、それはクジラの過去の捕獲頭数のデータと資源量（あるいはその時系列）だけなのです。

北西太平洋に索餌回遊してくるニタリクジラという種を例にとると、他のヒゲクジラ類同様に資源量推定にはライントランセクト法と呼ばれるサンプリング法が用いられました。クジラの発見回数のほか、群れサイズ、距離そして観測条件などの観測データを基に資源量を推定します。また、潜水中のクジラの見落とし率も必要に応じて推定し資源量の補正を行います。さらに、限られた船のリソースではクジラの回遊範囲全体をすべて調査することができず、そのため数年をかけて全体が調査されましたが、クジラは毎年同じところに同じ数だけ回遊してくるわけではないので、合計の資源量の推定誤差には分布回遊の年変動も考慮した不確実性を評価する必要があります。その際、ランダム性な分布変動だけでなく水温上昇による北へのシフトも同時に取り入れた解析を行いました。IWC/SCでは、調査方法のチェックから資源量推定方法および結果の妥当性についてまで会期中に議論されますが、様々な立場の研究者が参加している関係で議論はしばしば大変厳しく白熱します。このニタリクジラに関しては時間と労力はかなり費やしましたが適切な議論の末、資源量推定値が承認されました。なお、この資源量と捕獲頭数の情報を基に、環境収容力などの資源動態に関するパラメータが推定されますが、IWC/SCではこの際に、あえて不利な事前分布を利用し、保守的な捕獲限度量が算出されるような安全弁を設置しています。

次に、この捕獲限度量と空間的配分方法で管理を継続した場合のパフォーマンスがシミュレーションで評価されます。捕獲限度量の分ならどの海域で捕獲してもよいルールや、捕獲枠を日本の沿

岸に多く配分できる捕獲ルールは、燃料のコストを考えると大変効率のよい話なのですが、仮に日本の沿岸寄りと沖合寄りに遺伝的に異なる繁殖集団が来遊し、しかも沿岸寄りの集団が比較的小集団であった場合には、その小集団の枯渇のリスクが自ずと増してしまいます。さらに、細かい集団に分かれれば分かれるほど捕獲枠が減る仕組みになっているため、どのようなシナリオでシミュレーションを実施するか、この議論が捕鯨推進派および反対派にとって互いの生命線の議論となります。遺伝データの解析の重要性は言うまでもありませんが、形態データ、過去の捕獲位置、回遊の情報など様々な知見を基に総合的な判断を下すため、単純なモデル選択の議論にはとどまらず、また通常は意見が分かれます。そこで、想定されるシナリオ毎に“high”, “medium”, “low”のような可能性とその場合の枯渇率を付与した Decision table のようなまとめ方を行い、可能性が“high”であるシナリオの下で枯渇率が初期資源の54%以下となるような捕獲方式は採用されません。このように捕獲のシミュレーションにおいても安全策が講じられているので、いかに万全を期した管理方策がIWC/SCの下で実施されているかがお分かりかと思います。なお、ニタリクジラの場合にも幾つかの異なる集団構造がリストアップされ、その分だけ多少目減りしましたが捕獲枠が得られる結果となりました（ただし、IWCの本会議が機能不全状態であるため、この捕獲枠は残念ながら商業上は利用されていません）。

ここでは限られた紙面を利用してクジラの管理方式と統計的な側面について紹介しましたが、現実にはもう少し複雑で手の込んだ解析や計算を実施しています。ところで、水産資源に限らず野生生物の管理では失敗が許されないため、必然的に予防的なアプローチがとられます。しかし、そのような場であるからこそ、推測とその不確実性を考慮したりリスク解析が大変重要となり、そのベースとして統計学が大変重要な役割を果たしています。

6.2 統計学史

竹内 恵行 (大阪大学)

本欄で「学史」を扱うことを奇妙に思われる会員の方が多いのではないかと推察する。確かに比較的歴史の浅い「統計学」, 「数理統計学」の歴史を語るには時期尚早である, という意見はもっともである。だが, 現代統計学の礎を築いた一人である R.A. フィッシャーの “Studies of Crop Variation. I” が出版されてから90年が経過した今日, 歴史的観点から (数理) 統計学を問い直し, 位置付けても良いのではなかろうか。本稿では, 近年の統計学史研究の動向について, 筆者の知りうる範囲で紹介する。ただ, 筆者はカジュアルな統計学史 D. Salsburg, *The Lady Tasting Tea* (W.H. Freeman, 2001) の訳出以降, 我流で研究を始めたため, 視点や見解が偏っている可能性がある。その点についてはご容赦いただきたい。

1. 統計学史研究の現状

統計学史は, (1) 統計思想史, (2) 統計学説史, (3) 研究者史の3つに大別できる。

(1) は *The Taming of Chance* (Cambridge UP, 1990) の I. Hacking に代表されるように科学哲学者や科学史家によって研究されることが多い。

(2) の学説史では, シカゴ大学の Stephen Stigler が中心的研究者の一人であり, 1986年に出版された *The History of Statistics: The Measurement of Uncertainty before 1900* (Belknap Press of Harvard UP) は統計学説史の定番と言っても良いだろう。

(3) の研究者史は, K. Pearson やフィッシャーなどの研究者の学説ならびに人物そのものについての研究である。これには, 自伝や家族による伝記が含まれる。娘の Joan Fisher Box による *R.A. Fisher: the Life of a Scientist* (Wiley, 1978) はその代表である。

そもそも統計学史の研究や研究者は少ないが, 2000年前後より, 統計学史の研究書が立て続けて出版されるようになった。(2) の学説史に関しては, Stigler の *Statistics on the Table* (Harvard UP,

1999) の他にも Mary Baldwin College の Judy L. Klein が広義の時系列分析について, LSE の Mary Morgan は隣接する計量経済学の成立史についての研究を, それぞれまとめている。(3) の研究者史では, UCLA の T.M. Porter による *Karl Pearson* (Princeton UP, 2004) が出版されている。

また, 年配の統計学者による学史研究も同様に相次いで出版されている。コペンハーゲン大学の Anders Hald (2007年没) は, リタイア後に *A History of Mathematical Statistics from 1750 to 1930* (Wiley, 1998) をはじめ3冊の大著を出版している。カリフォルニア大学バークレイ校の E.L. Lehmann (2009年没) は, 回顧録である *Reminiscences of a Statistician* (Springer, 2007) の他に, フィッシャーとネイマンの関係を研究した *Fisher, Neyman, and the Creation of Classical Statistics* (Springer, 2011近刊) をまとめている。また, LSE の Arthur L. Bowley の研究が Samuel Kotz (2010年没) らによって近刊されるとの情報がある。さらに, Frederick Mosteller (2006年没) の自伝が弟子たちの編集によって *The Pleasure of Statistics* (Springer, 2010) として出版されている。

従来, 統計学史の専門雑誌はなかったため, 研究は書籍として発表されるか, *International Statistical Review* など歴史も扱う学術誌や, *Journal of History of Economic Thought* などの関連分野の学術誌で発表されることが多かった。しかし, 2005年より, フランスの社会科学高等研究院 (EHESS) とパリ第6大学, 第7大学によって, *Journal Electronique d'Histoire des Probabilités et de la Statistique* という電子ジャーナルが刊行されるようになり, 発表の場が広がっている。

さらに, *Statistical Science* 誌において, ほぼ毎年 “Conversation with …” という年配の統計学者に対するインタビュー記事が掲載されていることは注目されるべきであろう。このような形で統計学者の歴史を記録することは, 将来の学史研究の上で貴重な財産である。事実, いくつかの研究の元資料として使われ始めている。

2. 日本の統計学史研究

日本の統計学史研究は、統計学が輸入学問であることを反映してか、(3)の研究者史、とりわけ回顧録や自伝が多いという特徴がある。明治維新後、統計学および統計制度に寄与した杉亨二、呉文聰については、自叙伝や伝記が出版されている。また、戦中から戦後にかけて数理統計学の導入・発展に貢献された諸先輩方による、佐藤良一郎「数理統計学と50年」(日本統計協会『統計』, 1968-69)、北川敏男『統計科学の三十年』(共立出版, 1969)、森田優三『統計遍歴私記』(日本評論社, 1980)といった回顧録が出版されている。

統計学者に対するインタビューとしては、統計数理研究所の西平重喜氏を中心とする科学研究費プロジェクト(1980-82)があり、その速記録(全55巻)が統計数理研究所図書室等に所蔵されている。また、統計制度に関しては、法政大学日本統計研究所による関係者インタビューの記録(1990-2007)がある。

日本の統計学成立史は、薮内武司『日本統計発

達史研究』(法律文化社, 1995)など統計制度史の研究書で数ページが割かれているに過ぎない。日本統計学会創立50周年を記念して出版された『日本の統計学五十年』(東大出版会, 1983)が唯一の例外である。

3. 統計学史研究の今後

個人的な見解であるが、ネイマン=ピアソン以降の統計学の展開に研究の対象が移っていくとともに、数理統計学が今日のように近代科学に不可欠なものとなっていく経緯を科学哲学や周辺諸科学との関係で捉えなおす兆候があるように思われる。例えば、Southampton 大学の John Aldrich は19世紀末から20世紀初めにかけての現代統計学の状況を丹念に追っている。

また数学史とのアナロジーで考えると、統計学教育史も統計学史の一つの関心領域になるように思われる。「統計学」が大学の一般教養科目の必修科目に入った経緯など不詳のことも多い。これらについては、私自身を含め、今後の課題である。

7. 和文誌特集号投稿締切延期のお知らせ

特集「MCMC の経済・経営データへの応用」編集担当
大森裕浩(東京大学)・渡部敏明(一橋大学)

日本統計学会和文誌2011年9月号の特集「MCMC の経済・経営データへの応用」への論文投稿の締め切りを3月末としていましたが、昨今の状況を考え、2011年5月末に延期することにしました。投稿の締め切りは延期しますが、掲載は何とか9月号に間に合わせたいと思います。

つきましては、投稿を希望される方は、2011年5月末までに、2011年9月号の特集「MCMC の

経済・経営データへの応用」への投稿であることを明記の上、日本統計学会投稿規定 <http://www.jss.gr.jp/ja/journal/rule.html> に従い、論文をご送付下さい。論文は届き次第、審査を行いますので、締め切りは5月末ですが、できるだけ早めにお送り頂けると助かります。多くの方々からの投稿をお待ちしておりますので、よろしくお願いいたします。

8. 松田安昌会員の第7回（平成22年度）日本学術振興会賞受賞について

本会の松田安昌会員（東北大学大学院経済学研究科准教授）が「時空間統計学の理論と空間計量経済学への応用」により第7回（平成22年度）日本学術振興会賞を受賞されました。

日本統計学会から心よりお慶び申し上げます。

参考 URL：

http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/ichiran_7th.html

9. 統計検定の開始について

日本統計学会は（財）統計研究会および（財）統計情報研究開発センターとの共催で2011年11月から「統計検定」を開始します。

第1回試験 2011年11月20日（日）

試験会場：東京、大阪、その他

申込期間：2011年8月22日（月）～2011年10月5日（水）

詳細は <http://www.toukei-kentei.jp/> をご覧ください。

10. 修士論文・博士論文の紹介

最近の博士論文・修士論文を原稿到着順に紹介いたします。（1）氏名（2）学位の名称（3）取得大学（4）論文題名（5）主査または指導教員（両方の場合は指導教員，主査の順），の順に記載いたします。（敬称略，カッコ内は取得年月，ただし平成23年2～3月取得の場合は省略）。

博士論文

- （1）Faisal M. Zaman（2）博士（情報工学）（3）九州工業大学（4）Ensemble Methods Based on Optimal Selection and Addition of Classifiers（5）廣瀬英雄
- （1）石原庸博（2）経済学博士（3）東京大学（4）Efficient Bayesian estimation of multivariate stochastic volatility models with leverage effects（5）大森裕浩
- （1）兵頭昌（2）博士（理学）（3）東京理科大学（4）Some asymptotic properties of principal component analysis and discriminant analysis in

high-dimensional data（5）瀬尾隆

- （1）小谷野仁（2）博士（農学）（3）東京大学（4）Statistical Methods for Ecological and Epidemiological Data（5）岸野洋久
- （1）浅野礼美子（2）博士（経済学）（3）名古屋市立大学（4）社会的責任投資（SRI）のパフォーマンスと情報開示（5）三澤哲也
- （1）丸尾和司（2）博士（工学）（3）大阪大学（4）Inference of parameters of the power-normal distribution（5）白旗慎吾
- （1）永久保太士（2）博士（工学）（3）大阪大学（4）Nonparametric analysis of longitudinal data（5）白旗慎吾
- （1）Paul Sheridan（2）博士（理学）（3）東京工業大学（4）Statistical Inference of Scale-free Networks with Markov Chain Monte Carlo（5）下平英寿

修士論文

- （1）作村建紀（2）修士（3）九州工業大学

- (4) 項目反応理論を拡張した最適能力判定システム (5) 廣瀬英雄
- (1) 秦幸伸 (2) 修士 (3) 九州工業大学 (4) オークション価格の決定法 (5) 廣瀬英雄
 - (1) 原綾子 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Normal Approximation to Multivariate Sample Measures of Kurtosis (5) 瀬尾隆
 - (1) 宮川千晶 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) A New Multivariate Kurtosis and Its Asymptotic Distribution (5) 瀬尾隆
 - (1) 高見聖 (2) 修士 (3) 東京大学 (4) 対話型進化計算による花壇デザインとその性能評価 (5) 岸野洋久
 - (1) 安藤宗司 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Extended Ridit Score Type Quasi-Symmetry Model and Decomposition of Symmetry for Square Contingency Tables (5) 富澤貞男
 - (1) 井上貴博 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Expected mean squared error for some symmetry models in three-way contingency (5) 富澤貞男
 - (1) 榎本結衣 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) On measure of departure from marginal homogeneity for square contingency tables with nominal categories (5) 富澤貞男
 - (1) 小松正明 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Measure of Departure from Double-symmetry (5) 富澤貞男
 - (1) 田口陽介 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Incomplete Double Symmetry Model for Square Contingency Tables (5) 富澤貞男
 - (1) 羽田徳成 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Measure of Departure from Marginal Point-Symmetry for Three-Way Contingency Tables (5) 富澤貞男
 - (1) 増村一穂 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Improvement of Measures for Marginal Homogeneity in Square Contingency Tables (5) 富澤貞男
 - (1) 松村優 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) On test of quasi point symmetry for square contingency tables (5) 富澤貞男
 - (1) 宮澤光太 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Measure of departure from average cumulative symmetry for square tables having ordinal categories (5) 富澤貞男
 - (1) 村瀬啓輔 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) On Distance Measure of Departure from Symmetry for Multi-way Contingency Tables (5) 富澤貞男
 - (1) 小林裕子 (2) 修士 (理学) (3) 筑波大学 (4) Robust Model Selection by β -Lasso Estimation (5) 青嶋誠
 - (1) 加藤万莉絵 (2) 修士 (理学) (3) 筑波大学 (4) Pathway Analysis for High-Dimensional Data (5) 青嶋誠
 - (1) 前廣芳孝 (2) 修士 (数理情報) (3) 南山大学 (4) 2重非心 F 分布の近似法についての研究 (5) 松田真一, 木村美善
 - (1) 志津綾香 (2) 修士 (数理情報) (3) 南山大学 (4) クラスター数決定法の比較 (5) 松田真一, 木村美善
 - (1) 高橋知也 (2) 修士 (数理情報) (3) 南山大学 (4) タグチメソッドの SN 比における信頼区間の適用方法の研究 (5) 松田真一, 木村美善
 - (1) 浦拓哉 (2) 経済学修士 (3) 東京大学 (4) Fast and Efficient Estimation of the Structural Models with Fixed Point Problems (5) 大森裕浩
 - (1) 梶本功弥 (2) 修士 (理学) (3) 中央大学 (4) ディリクレ過程混合モデルを持つ状態空間モデルにおける MCMC-Based Particle Filter を用いた状態の推定 (5) 酒折文武
 - (1) 大里隆也 (2) 修士 (理学) (3) 中央大学 (4) 過分散カウントデータのベイズモデリングにおけるモデル選択基準の評価とその応用 (5) 酒折文武
 - (1) 高城累 (2) 修士 (理学) (3) 中央大学 (4) 傾向スコア法における共変量選択 (5) 酒折文武

- (1) 宮◆瑛子 (2) 修士 (理学) (3) 中央大学
(4) 線形・非線形主成分分析とその応 (5) 小西貞則
- (1) 竹中紳治 (2) 理学修士 (3) 神戸大学
(4) 多重比較におけるホルムおよびベリの方法に関する考察 (5) 稲葉太一
- (1) 仲真弓 (2) 修士 (理学) (3) 慶應義塾大学
(4) Application of Stochastic Growth Model to Describe Weight Distribution of Seabed Fauna (5) 柴田里程
- (1) Hallinger Benoit (2) 修士 (理学) (3) 慶應義塾大学
(4) Analysis of Air Pollution PM2.5 data: Study of periodicity and influence of weather conditions (5) 南美穂子
- (1) 王敏真 (2) 修士 (理学) (3) 慶應義塾大学
(4) 角度データのための構造モデルと関数関係モデル (5) 清水邦夫
- (1) 井本智明 (2) 修士 (理学) (3) 慶應義塾大学
(4) Lagrange 分布族と待ち行列過程の関係に関する研究 (5) 清水邦夫
- (1) 谷川正磨 (2) 修士 (理学) (3) 慶應義塾大学
(4) リスク理論における配当金問題の研究 (5) 清水邦夫
- (1) 服部 誠 (2) 修士 (経営)「金融戦略 MBA」(3) 一橋大学 (4) 多変量ダイナミックコピュラを用いた新興国株式市場の相互依存構造に関する分析 (5) 中村信弘
- (1) 伊藤拓之 (2) 修士 (経営)「金融戦略 MBA」(3) 一橋大学 (4) 確率ボラティリティモデルを用いたイデオシンクラティック・ボラティリティの実証分析 (5) 中村信弘
- (1) 元利大輔 (2) 修士 (経営)「金融戦略 MBA」(3) 一橋大学 (4) 我が国の年齢階級別リスク資産保有比率に関する研究 (5) 本多俊毅
- (1) 三上智之 (2) 修士 (理工学) (3) 成蹊大学
(4) Exploring multivariate binary data by classification trees (5) 岩崎学
- (1) 渡邊創人 (2) 修士 (工学) (3) 大阪大学
(4) 簡易的パラメータ変換に基づく歪形状正規分布のベイズ推測 (5) 黒木学
- (1) 野見山修二 (2) 修士 (工学) (3) 大阪大学
(4) 多元分割表における star -distribution の構成可能性について (5) 黒木学
- (1) 藤本翔太 (2) 修士 (工学) (3) 大阪大学
(4) Analysis of high-dimensional data: Effect of covariance structure on asymptotic distributions of test statistics on mean vector (5) 狩野裕
- (1) 鹿田康晴 (2) 修士 (工学) (3) 大阪大学
(4) A comparison among FastICA algorithms for independent components distributed with the normal inverse gaussian (5) 熊谷悦生
- (1) 青木正良 (2) 修士 (理学) (3) 東京工業大学
(4) Smoothed Bootstrap 法によるマルチスケール・バギングの安定化 (5) 下平英寿
- (1) 小松勇介 (2) 修士 (理学) (3) 東京工業大学
(4) ブートストラップ法の高速近似を用いた LiNGAM 因果構造推定の信頼性評価 (5) 下平英寿
- (1) 辻亮太 (2) 修士 (工学) (3) 大分大学
(4) 焦点をあてた検定におけるエシェロンデンドログラムの活用に関する研究 (5) 和泉志津恵
- (1) 柏村拓哉 (2) 情報理工学修士 (3) 東京大学
(4) グラフィカルモデルへの imset を用いた代数的アプローチ (5) 竹村彰通
- (1) 工藤大誠 (2) 情報理工学修士 (3) 東京大学
(4) 分割表の Graver Complexity の評価 (5) 竹村彰通

11. 外国人研究者来日案内

●氏名：Nitis Mukhopadhyay
所属：Department of Statistics, University of

Connecticut, U.S.A.
滞在期間：2011年10月

滞在先：筑波大学

世話人：青嶋 誠

●氏名：Prof. Ziheng Yang

所属：University College London

滞在期間：2011年1月31日

滞在先：東京大学農学生命科学研究科

世話人：岸野洋久

●氏名：Prof. Jeffrey L. Thorne

所属：North Carolina State University

滞在期間：2011年3月7日－2011年3月13日

滞在先：東京大学農学生命科学研究科

世話人：岸野洋久

12. 評議員会議事録

2010・2011年度 第3回評議員会 議事録

日時：2011年3月5日（土）18：10～20：00

場所：立教大学池袋キャンパス12号館2階会議室

出席者：竹村彰通会長，評議員：岩崎学，大屋幸輔，狩野裕，川崎茂，国友直人，栗原考次，桑原廣美，駒木文保，西郷浩，佐藤朋彦，佐藤学，竹内光悦，竹田裕一，田村義保，塚田真一，椿広計，藤井良宜，前田忠彦，楨田直木，美添泰人，吉田朋広，若木宏文，渡部敏明（以上24名，委任状15通）（オブザーバー：中西寛子，上野玄太）

冒頭，竹村会長より定足数確認後，開会宣言がなされ，オブザーバー2名の出席が承認された。

議題：

報告事項

議事次第に先立ち，竹村新会長から挨拶があった。

<議題1>理事会からの報告

岩崎理事長より，議題2，3として法人化と統計検定の報告を行うことが述べられた。

<議題2>法人化に関する報告

（1）2011年4月1日からの体制について

岩崎理事長より，2011年4月1日に一般社団法人

人として日本統計学会が発足することが報告された。従来の評議員は代議員と名称を変え，4月1日から2年の任期となることが報告された。理事は現在より減員して12名とし（現員17名），減員分は委員会を別に組織して対応することが報告された。また，監事は会議への出席義務が求められるため，従来の2名から3名と増員することが報告された。資料に基づき，理事，監事の候補者が示された。

（2）各種規程について

中西庶務担当理事より，資料に基づき，一般社団法人日本統計学会理事会において提案された各種規程が説明された。今後の手順として，一般社団法人日本統計学会の社員総会により承認されたあと，正式に認められるとの報告があった。

岩崎理事長より，代議員会は6月と3月に行われること，従来の連合大会時に開催されていた総会に代わるものとして会員大会（仮称）を計画していること，次回の代議員選挙は2013年1月までに行うことが報告された。

美添評議員より，代議員会のうち，任期中2年目の3月の会は不要ではないかという意見が出され，当該時期に検討することとなった。

<議題3>統計検定に関する報告

美添評議員（前会長，質保証委員会委員長）より，統計検定開設の沿革と内容，現状が報告された。

岩崎理事長より、2011年11月20日に第1回が実施されること、受験を薦めていただきたい、との報告があった。また、統計検定を含めた、統計の質保証を扱う財団法人を設立する予定が報告された。

<議題4>春季集会について

岩崎理事長より、翌日（3月6日）に立教大学（池袋）で開催される春季集会への参加の依頼があった。

<議題5>各委員会からの報告

[学会活動特別委員会]

なし。

[学会組織特別委員会]

狩野委員長より、特にないとの報告があった。

[統計教育委員会]

藤井委員長より、前評議員会以降に2回の委員会を開催したこと、3月4日（金）、5日（土）に開催した統計教育の方法論ワークショップは

150名以上の参加があり盛会に終わったこと、今回の連合大会において統計の質保証に関する企画セッションを申請したこと、の報告があった。

<議題6>その他

岩崎理事長より、各学会賞への推薦依頼があった。

審議事項：

<議題7>入退会者承認

中西庶務担当理事より、回収資料に基づき入退会者が報告され、承認された。

<議題8>2011年度 定時社員総会の開催について（2011年6月）

岩崎理事長より、6月までに定時社員総会を実施することが提案され、承認された。

<議題9>その他

特になし。

13. 理事会議事録

2010・2011年度 第2回理事会議事録

日時：2011年2月5日（土）12：00～15：30

場所：統計数理研究所八重洲サテライトオフィス
会議室

出席者：竹村彰通会長、岩崎学理事長、中西寛子（庶務）、上野玄太（庶務）、山下智志（会計）、小林正人（会誌編集・欧文）、青嶋誠（会誌編集・和文）、根本二郎（広報・会報）、縄田和満（渉外・一般）、佐藤美佳（渉外・国内）、汪金芳（渉外・海外）、星野伸明（大会・プログラム）、古澄英男（大会・運営）、吉田清隆（幹事・サーバ）、久保田貴文（幹事・ウェブ）（以上15名、カッコ内は役割分担）

報告事項：

<議題1>会長挨拶及び報告

竹村会長より、新任の挨拶があった。

<議題2>理事長からの報告

岩崎理事長より、以下の2件の報告があった。

（1）日本統計学会の法人化について

日本統計学会は、2011年4月1日に一般社団法人に移行することが報告された。資料に基づき、定款の説明があった。

（2）統計検定について

2011年から統計検定を実施すること（第1回は2011年11月20日実施）、2月中にホームページに案内を出すことが報告された。また、王立統計学会（Royal Statistical Society, RSS）と契約を結び、RSSが主催する試験を日本でも行う計画が述べられた。

＜議題3＞各理事からの報告

〔欧文誌〕

小林担当理事より、6篇が受理されたこと、第40巻第2号が3月に発行の見通しであることが報告された。中西理事より、早急な発行の依頼があった。

〔和文誌〕

青嶋担当理事より、第40巻第2号（2011年3月発行予定）は4篇の収録があり、3月上旬の発行予定であることが報告された。論文作成のテンプレートを準備し、ホームページ上で公開したことが報告された。投稿規程を渡部前担当理事と協力して改訂中であることが報告された。第41巻第1号（2011年9月発行予定）、第2号（2012年3月発行予定）それぞれの進捗状況と予定が報告された。

〔広報（会報）〕

根本担当理事より、会報No.146は（2011年2月7日の週）に発行されることが報告された。資料に基づき、会報No.147（2011年4月25日発行予定）の掲載予定項目が示され、記事の構成について意見交換がなされた。竹村会長より、統計の教え方に関するシリーズ記事の企画が提案された。

〔渉外（一般）〕

縄田担当理事より、資料に基づき第5回春季集会（2011年3月6日）の開催案内が示された。春季集会の招待講演者の旅費補助の申し出があり、審議の結果、認められた。第6回春季集会の構成、開催場所に関する問題提起がなされ、継続審議事項とされた。また、春季集会のプログラム・案内を学会としてホームページに掲載するという提案があった。

〔渉外（国内）〕

佐藤担当理事より、春季集会のポスター発表の申込状況について報告があった。ポスター発表の表彰要件の一つである学会への入会予定時期についての問題提起がなされ、審議の結果、新年度か

ら（2011年4月から）の入会が表彰要件を満たすことが認められた。

〔渉外（海外）〕

汪担当理事より、日本・韓国・台湾の合同セッションが、2011年は台湾で開催されること、およびその進捗状況が報告された。

〔大会（プログラム）〕

星野担当理事より、資料に基づき2011年度統計関連学会連合大会の予定及び進捗状況が報告された。日本統計学会の企画セッションの内容に関して審議がなされ、会長講演・学会賞表彰式・学会賞受賞者記念講演を行うことが決定された。

〔大会（運営）〕

古澄担当理事より、サーバーの確認作業を行う予定であることが報告された。岩崎理事長より、地域とのつながりを強めるようなセッション企画のアイデアが示された。

〔会計〕

山下担当理事より、新法人として口座の開設および閉鎖の作業を進めていること、移行の手続きのサポートを来年度に会計コンサルタントに依頼する予定であることが報告された。

〔ウェブ〕

久保田担当幹事より、ウェブの管理状況に関する報告があった。

〔サーバー〕

吉田担当幹事より、メーリングリストを管理するサーバーの移行に伴い、2011年1月17日～27日のメールに不具合が生じたことが報告された。

審議事項：

＜議題1＞日本統計学会欧文誌の海外出版社からの発行、電子ジャーナルの collection について

（1）小林理事より、学会欧文誌の海外出版社か

らの発行についての問題提起がなされ、論文の一般公開時期や費用に関して議論がなされた。
(2) 小林理事より、論文記事のバックナンバーの扱いを専門とするウェブサイトへの学会欧文誌の提供に関する問題提起があった。

＜議題2＞今後の会務について

岩崎理事長より、新法人の理事会の構成においては、理事の人数を現在の17名より12名程度に減らすこと、減員分の活動は委員会活動として再組織し、現体制と同様な運営を進めるという提案がなされた。

＜議題3＞来年度予算について

山下理事より、資料に基づき平成23年度の予算案の説明があり、今年度中に新法人の理事から承

認を受ける必要があることが報告された。また、山下理事より、賛助会員の会費についての問題提起があり、審議の結果、賛助会員および団体会員には法人化後の定款に記された会費を通知することが決定された。

＜議題4＞法人化に関する学会会員向けアナウンスについて

岩崎理事長より、資料に基づき、法人設立の連絡文書案が示され、審議の結果、会員向けに通知することが決定された。

＜議題5＞入退会者承認について

中西理事より、回収資料に基づき入退会者が紹介され、承認された。

14. 新刊紹介

本会会員からの投稿による新刊図書の紹介記事を掲載します。

●山口幸三著『現代日本の世帯構造と就業形態

の変動解析 公的統計のミクロ統計活用序説』財団法人日本統計協会，2,940円（税込み），2011年2月

15. 学会事務局から

学会費払込のお願い

2011年度会費の請求書が会員のお手元に届いていることと思います。会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします。速やかな納入にご協力をお願い申し上げます。また便利な会費自動払込制度もご用意しています。次の要領を参照の上、こちらもご活用下さい。

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6

能楽書林ビル5F

財団法人 統計情報研究開発センター内

日本統計学会担当

Tel & Fax : 03-3234-7738

E-mail : shom@jss.gr.jp

訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。

藤田 利治 会員

入会承認

明土真也, 阿部貴行, 生亀清貴, 菅田詳, 中井陸運, 中島建久, 仲村敏隆, 檜崎正剛, 成定里加子, 古谷直大, 矢原耕史 (敬称略)

退会承認

石山行陽, 伊藤政志, 長内智, 菊地淳, 河野和正, 近昭夫, 中山慶一郎, 早川久夫, 林義弘, 松浦弘幸, 森川敏彦, 柳田義章, 渡辺浩 (敬称略)

現在の会員数 (2011年3月31日)

名誉会員	20名
正会員	1,370名
学生会員	51名
総計	1,441名
賛助会員	15法人
団体会員	5団体

16. 投稿のお願い

統計学の発展に資するもの, 会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。以下のような情報も歓迎いたします。

- 来日統計学者の紹介

訪問者の略歴, 滞在期間, 滞在先, 世話人などをお知らせください。

- 博士論文・修士論文の紹介

(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月 をお知らせください。

- 求人案内 (教員公募など)

- 研究集会案内

- 新刊紹介

著者名, 書名, 出版社, 税込価格, 出版年月をお知らせください。紹介文を付ける場合は100字程度までとし, 主観的な表現は避けてください。

できるだけ e-mail による投稿, もしくは, 文書ファイル (テキスト形式) の送付をお願い致します。

原稿送付先:

〒451-0052 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院経済学研究科
社会環境システム専攻

根本 二郎 宛

Tel : 052-789-4929

Fax : 052-789-4924

E-mail : koho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用 e-mail アドレス)

- 統計学会ホームページ URL :
<http://www.jss.gr.jp/>
- 統計関連学会ホームページ URL :
<http://www.jfssa.jp/>
- 統計検定ホームページ URL :
<http://www.toukei-kentei.jp/>
- 住所変更連絡用 e-mail アドレス :
meibo@jss.gr.jp
- 広報連絡用 e-mail アドレス :
koho@jss.gr.jp
- その他連絡用 e-mail アドレス :
shom@jss.gr.jp